

雨の日も晴れの日も泣く

むかし、あるお寺に、賢い和尚さんがいました。そのお寺の門前に、茶店がありました。茶店のおばあさんは、いつも表へ出ては、空もようばかり見ていました。

あるとき、和尚さんがお経をすませてお寺から出てくると、またおばあさんが空を見ていました。和尚さんが、

「きょうは、いいお天気ですねえ」と、声をかけると、おばあさんは、

「いいお天気だったら困るんです」といって、泣きました。和尚さんがおどろいて、

「どうしてお天気がいいと困るんですか」ときくと、

「上の息子が傘を売っていますのでね。お天気だったら傘が売れないので悲しいんです」といいました。

またあるとき、和尚さんがお寺から出てきたら、ひどい雨が降っていました。おばあさんが、また空を見て泣いています。

「おばあさん、どうして、雨だといっっては泣き、晴れだといっっては泣くんですか」と、和尚さんは尋ねました。おばあさんは、

「下の息子が草履を売っていますのでね。雨だったら草履が売れないので悲しいんです」といいました。

和尚さんはいいました。

「おばあさん、そんなこといっではいけないよ。天気がよければ、今日は草履がよく売れるから、下の子が喜んでるだろうなあと思ひ、雨が降ったら、今日は傘がよく売れるから、上の子が喜んでるだろうなあと思ひてやればいいのです」

おばあさんは、「なるほど、それもそうだ」と、泣かなくなったということです。

原話：『浪速の昔話』笠井典子編 日本放送出版協会刊

再話：村上郁

